



特別審査委員賞 [大学生の部]

少子化と高齢化の現状を掛け合わせて「高齢者宅による学童保育」というアイデアに変換させた視点の新鮮さや、安全面への考察が高評価につながりました。

小一の壁から小一の扉へ 「高齢者宅による学童保育」

群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部3年

高瀬 彩菜 たかせ あやな

1. はじめに

1-1. きっかけ

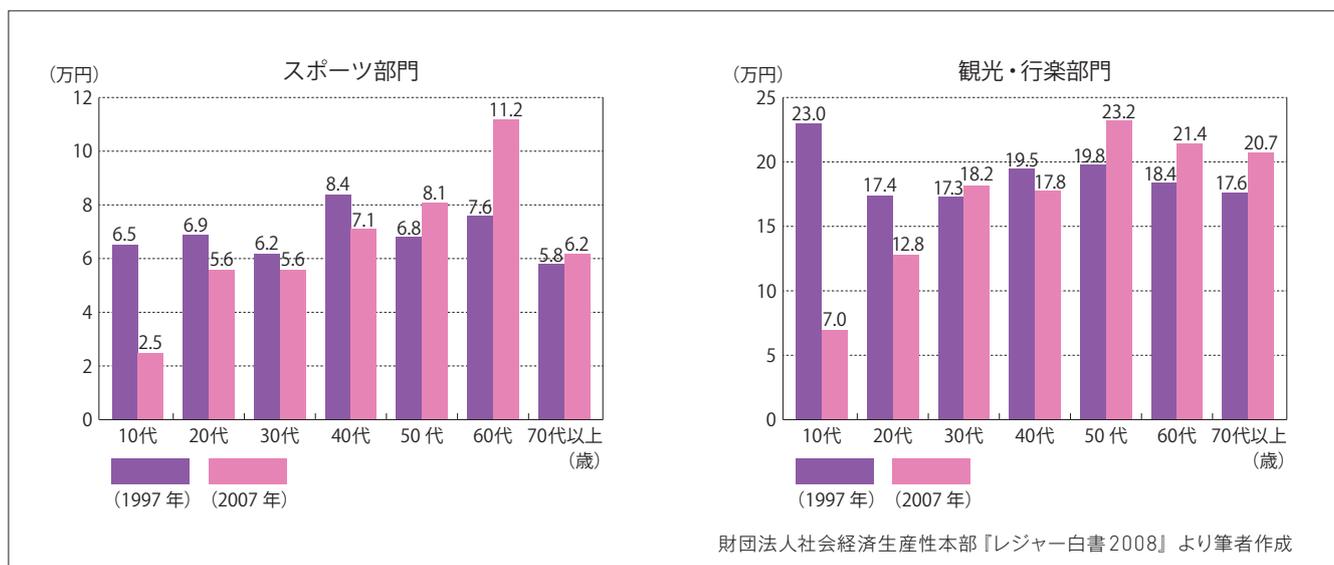
高齢化というワードをポジティブな意味を持つワードに一変させること、また親の負担と感ずるものを軽減させること、これは私が一生をかけて挑戦していきたい夢であり、こだわりでもある。今日の日本では、高齢化が顕著な問題として取り上げられている。メディアによって報道される高齢化問題は、ほとんどがネガティブな要素を含んで用いられている。昔から根っからのおばあちゃん子だった私は、祖母を含んだこの高齢者たちが、実は今日の日本にはなくてはならない財産であることを証明したい。また、長い間片親という環境で育ってきた私は、子どもが小学校に上がった時の親に増える負担をよく母親から感じ取っていた。もしも、親にかかるこの負担を高齢者が救うことができる

システムが日本に存在すれば、双方の問題が解決できる理想の未来社会が期待できると考え、提章では両者が得をするウィン・ウィンのシステムを提言していく。

1-2. 現状

まず、現代の高齢者について言及しておく。今日の高齢者の余暇の過ごし方は実にアクティブであり、(財)社会経済生産性本部「レジャー白書2008」からは、積極的にスポーツや観光にお金を使っていることが読み取れる。また、内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」(平成17年8月調査)、および内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」からは、高齢者の約半数はNPO活動に参加したことがある、または関心を持っていることがわかる。これらの現状より、高齢者には活力が十分あっ

図1: 余暇消費額の年代比較



て、その活力をNPO活動のような形で発揮することができる場所が存在すれば、需要はあると考えられる。

次に、小一の壁である。小一の壁とは主に共働き家庭に発生する問題で、子どもが小学校へと入学することを境に、公的学童保育の預かり時間の短さから親の負担が増加することを指す。公的学童保育では最長19時までしか預けることはできず、また、小学校入学初日から預けられないところがほとんどである。よって、両親は就業形態を変更しなければいけない可能性も出てくる。さらに、小学生は思春期へと移行する時期であり、大人の存在が必要不可欠であるにも関わらず、現代社会では核家族化や共働きが増加しているため、学校外での教育機能の低下も避けられない。公的学童保育より効率的な学童システムがあれば、こちらも需要が見込める。

2. 提章

2-1. 「高齢者宅による学童保育」の提案

1-2. から、双方にはそれぞれ問題があるが、何らかのシステムが存在することによって解決できると考えられる。そこで私は、

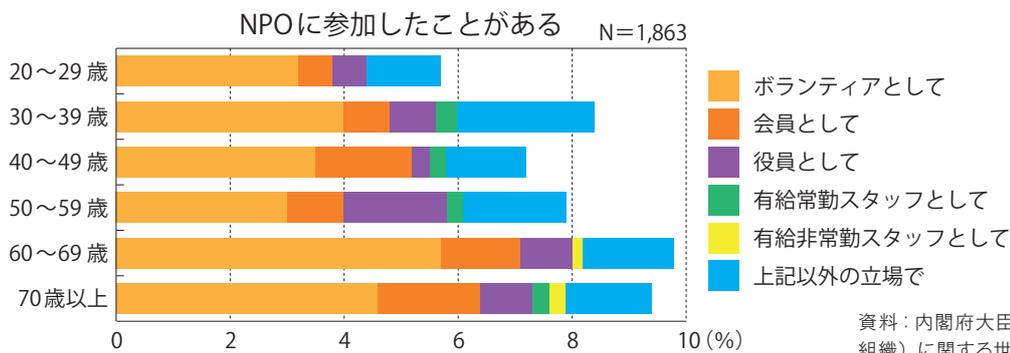
「高齢者宅による学童保育」を提案する。高齢者の自宅で、小学校に進学した子どもを親の退勤時間まで預かるというシステムである。

このシステムが公的学童保育と異なるところは3つある。1つ目は預かり開始日である。既存の公的学童保育は4月1日から預かってもらえない学童保育もあることが「東急グループホームページ <http://www.kidsbasecamp.com/>」からわかるので、このシステムは原則として4月1日から預かりを開始するものとする。

2つ目は預かり時間である。公的学童保育は平日放課後から18時までで、先ほども述べたように、場合によっては勤務時間を見直さなければ迎えに行けない。そこで、このシステムでは、親と高齢者の話し合いにより預かり時間に関して臨機応変に対応していく。そうすることによって、早く迎えに行けるときは早く、残業になってしまった場合は遅くまでの預かりを可能にする。

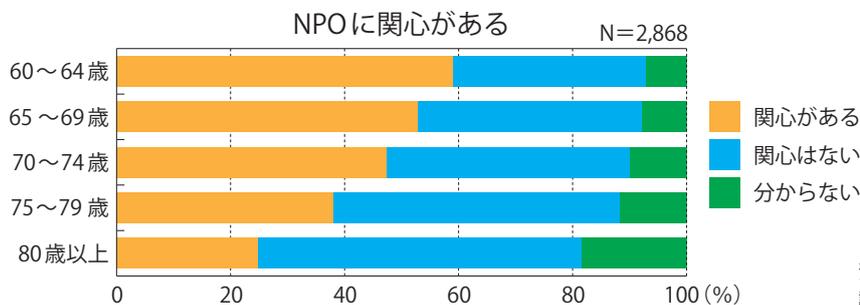
3つ目は人数だ。通常、公的学童保育は少人数の学童保育指導員らが大量の子どもたちを預かる。しかしこのシステムは、高齢者宅で行うもので、高齢者1人から2人に対して子ども1人から4、5人までという、子どもが何をしても目の行き届く範囲と

図2：NPO活動に参加した経験



資料：内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」(平成17年8月調査)

図3：NPO活動への関心



資料：内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」

いう環境を設定する。これらにより親も心配が少ないし、高齢者にとっても大人数預かるよりも負担が軽減する。また、孫と触れ合っている感覚を実現することができる。さらには子ども1人だけと限定してしまうより、ケースによっては子どもを4人くらいに設定することで、子ども同士も遊べる環境を実現することができる。

次からは、このシステムを実際行うにあたって必要なことをより詳しく説明していく。

2-2. 「高齢者宅による学童保育」のシステムの内容

「高齢者宅による学童保育」のシステムを確立するにおいて必要なことは、1.会社の設立、2.利用者登録、3.マッチング作業、の3つのステップに分けることができる。その3つのステップを順を追って説明していく。また、最後に料金について説明する。

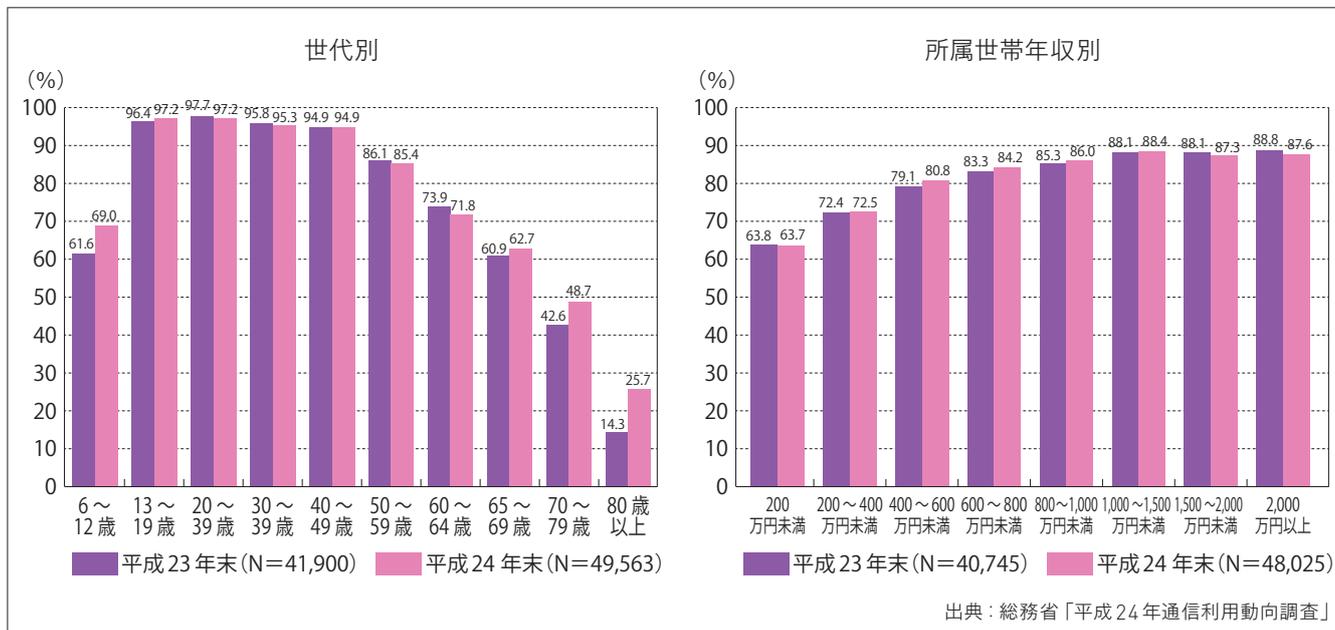
ファーストステップとして、会社を設立する。会社を設立するうえで、この後のセカンドステップで詳しく説明するが、従業員は基本的に会社に通勤する必要がない。主な従業員がこのシステムを利用することを決めた高齢者なので、高齢者の仕事場所はその方自身の自宅であるからだ。よって、基本的に通勤が必要な社員はいないが、管理等の仕事のためにごく少数の従業員は通勤が必要である。その従業員は女性をターゲットにする。今回提案するシステムには女性従業員の方が利点が多いので、女性を雇用する。その利点については、この後のセカンドステップで言及する。

セカンドステップとして、従業員と利用者、すなわち高齢者と小学生の子どもを持つ親がすることを手順に沿って説明して

いく。まず、高齢者についてである。自宅で小学生を預かることを希望する高齢者が、今回のシステムの従業員となる。ただ、会社へ通う必要がないため、面倒な手間は省ける。この高齢者の募集方法だが、現代の高齢者はネットを使いこなすといわれているが、総務省「平成24年通信利用動向調査」からは、やはりまだ普及率が高くないことが読み取れるので、通勤する女性従業員の訪問勧誘により「自宅による学童保育」に興味のある高齢者を募る。女性の方が子育てにおいて知識が豊富であるため、高齢者にこのシステムを利用してみたいか勧誘する際に、男性よりもよりスムーズな対応ができる。この勧誘により「利用する」と回答した高齢者は、自宅の場所・子どもを預かる際の条件（男児または女児等）を登録。あとは開始日を待つのみである。登録した瞬間、高齢者は従業員となる。次に、利用者である親だが、こちらは訪問勧誘ではなく、ネット登録を主とする。会社で用意した登録フォームに従い、子どもの学校名・性別・性格や趣味等の項目を記入、登録すれば完了である。両者これで登録は完了だ。

最後のステップは、マッチング作業である。こちらは、登録をした高齢者と利用者の親の情報を照らし合わせ、会社で利用希望の小学生に合った高齢者宅を親に紹介する。そして小学校入学の前までに、高齢者宅へ従業員同行で子どもと3者で出向く。ここで直接高齢者と会い、実際にその自宅でも良いと思えるかどうか（人間性や自宅の雰囲気等）を判断してもらう。納得がいったら、4月1日から実際に預かりが開始される。なかなかマッチングできない可能性もあるので、このマッチング作業は原則として子どもがまだ保育園に通っている時から徐々に

図4：属性別インターネット利用率



行っていく。

最後に、金額の設定だが、学童保育のように従業員が何人もいるわけではなく、会社の運営費もさほどかからないので、公的学童保育と比較して安く預けることが可能である。また、従業員を通年雇う場合、厚生労働省から特別給付金が支給されることが厚生労働省ホームページからわかるので、それらも活用していく。次に、このシステムから期待できる効果・影響について説明していく。

2-3. 効果・影響

このシステムにおいて期待できる効果は、大きく分けて1.高齢者の雇用、2.働く親の支援、3.世代間交流、の3つがある。

1つ目の高齢者雇用とは、65歳で定年した後の高齢者の働き口がなかなかないというのが現状で、実際警備員などで高齢者をよく見かけるが、基本的に年金暮らしの高齢者にとって、このシステムは雇用場所の提供となる。現在、日本のシニア世帯は、厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」より約1,161万世帯と言われている。需要は大いにあると言えるだろう。

2つ目だが、このシステムは保育時間等が高齢者との話し合いで決まるため、周りの児童と合わせる必要もなく、働く親にとってはワークスタイルを大きく変える必要がないという大きなメリットがある。

そして、なんといっても3つ目の世代間交流は大きな効果になる。現在の日本では核家族化が進んでおり、子どもが簡単に祖父母に会える環境でないことが多い。そのため、子どもは昔からの遊びや風習を知らずに大人へ成長していく。親が働いていれば、なおさらそのようなことを体験する時間がないだろう。子どもたちが普段日常的に体験することが減った遊びや食事、言葉などを高齢者から学ぶ場所になれば、学校外の時間もより有意義な時間になるだろう。高齢者にとっても、普段孫となかなか会う機会がない人や孫が欲しくてもいない人にとっては、かけがえのない時間になるだろう。実際、便利屋に「孫をレンタルしたい」と頼んだ人がいる、というニュース番組を観たことがある。

このようなシステムが実現すれば、希薄となった世代間交流が活発になる時代が来るかもしれない。

2-4. 問題点と解決方法

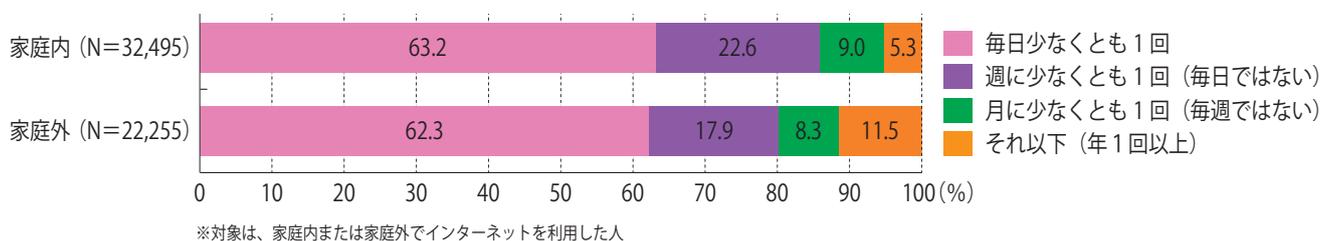
最後に、このシステムによって懸念される問題点とその解決方法について説明する。このシステムによって一番大きな問題となるのは、安全面だ。公的学童保育は、施設の設備、構造ともに安全面に配慮してあるため、高齢者の自宅は公的学童保育よりも安全面では劣る。また、従業員に関しても、学童保育における知識がある公的学童保育の従業員に比べ、高齢者には知識はなく、いざとなった時の対処方法がない。さらに、マッチング作業の時の面談だけでは高齢者の本質は理解できず、犯罪が起こってしまう可能性も懸念される。

それらの解決方法として、まず、会社勤務の女性従業員に定期的に巡回作業を行ってもらう。定期的に自宅を訪問することによって、犯罪を防ぐほか、いざとなった時に駆けつけられる環境を整える目的である。次に、高齢者宅に会社とすぐつながる電話又はブザーを設置しておく。子どもに危険が迫った時、それを使えば会社と簡単にやりとりができるようにするための。最後に、子どもを預けることが決まった高齢者には、学童保育における簡単な知識を学ぶための講座を受けてもらう。また、それらをまとめた冊子を配布し、高齢者が空いている時間に学べる環境も整えておく。以上のことで問題点を解決する。

3. まとめ

現在、学童保育の数よりも保育園・幼稚園の数が少ないことが話題として取り上げられ、そちらの問題の対策は市町村レベルでどんどん解決している。高架下に保育園や幼稚園を作るなど、工夫がなされている。しかし、子どもが小学校に入学した途端、子どものケアについてはないがしろにされがちである。また、核家族化も進み、世代間交流が図れない子どもたちは、古き良き日本に触れることもなく、成熟した大人へ成長していくの

図5：家庭内外別インターネット利用頻度



出典：総務省「平成24年通信利用動向調査」

である。このシステムを導入すれば、高齢者、子ども、親にとって利益が見込める。それは単なる金銭面の利益だけではなく、お金では計り知れない経験・時間の利益である。高齢者に新たな生きがいを創出し、自分たちが世の中で必要とされていることを実感できることによって、これからもどんどん増えていこうとする高齢者がさらに活発になる。それにより、暗いニュースが多いように感じられる現在の日本が明るくなるだろう。また、働く親にとっては、子どもを大切にしながら自分のキャリアアップを図れるといった、今までは諦めていた両方を欲張る人生が実現できる。どんな立場の人も平等に輝ける社会、それが私の目指す未来社会である。

参考文献

- ・「レジャー白書2008 ～「選択投資型余暇」の時代～」財団法人社会経済生産性本部、2008年
- ・内閣府大臣官房政府広報室「NPO(民間非営利組織)に関する世論調査」、平成17年8月調査
- ・内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査(平成15年度)」
- ・東急グループの学童保育 キッズベースキャンプ「小一の壁とは?」
<http://www.kidsbasecamp.com/workingmother/01/index.html>
- ・厚生労働省「特定求職者雇用開発助成金(特定就職困難者者雇用開発助成金)」2014年
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/koyou/kyufukin/tokutei_konnan.html
- ・総務省「平成24年通信利用動向調査」2013年
http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01tsushin02_02000058.html
- ・総務省「平成25年版 情報通信白書」
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/pdf/n4300000.pdf>
- ・日本水産株式会社「役立つデータクリッピング 70歳以上の元気な高齢者」
http://www.nissui.co.jp/academy/data/08/data_vol08.pdf
- ・「小一の壁って何? 就学後も子の預け先不足」『日本経済新聞』(日本経済新聞社、2014年8月25日付夕刊)
- ・厚生労働省「平成25年国民生活基礎調査」
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa13/dl/02.pdf>

[受賞者インタビュー]

人と人のつながりを大切に、世代や背景の違う人たちと交流していきたい



——コンテストに応募した理由、きっかけは?

大学のゼミで、「自分の目指す未来社会をデザインするために、どう行動していくか」といった内容で日々学んでいるのですが、今回のこのコンテストのテーマと私たちが学んでいることが一致したため、応募を決めました。

——この論文を書く上で苦労したことは?

私の論文は特に安全対策が難しく、犯罪を未然に防ぐ策を考えるのに苦労しました。

——この論文を書いたことで発見したことや良かったことはありますか?

人と人のつながりがあるからこそ、新しい何かが生み出されるということを感じました。また、新しい何かを生み出すことによって、人と人のつながりも生み出すことができると感じました。

——今、どんなことをしている時間が楽しいですか?

初めて会った人(子供から高齢者まで)とコミュニケーションを取っている時間が楽しいです。世代によって会話の内容も全く違うので、自分の知らない世界を体験させてもらえます。今後もバックグラウンドの異なる人たちと交流していきたいです。